

第1回豊明市総合教育会議 会議録

日時 令和7年12月26日（金）午後1時30分～

場所 豊明市役所 新館4階 第1委員会室

構成員

市長	小浮 正典
教育委員会 教育長	藤井 和久
同 教育長職務代理者	青木 睦
同 委員	井戸 貴子
同 委員	南 俊樹
同 委員	八尋 久美子

事務局

行政経営部長	伊藤 正弘
秘書広報課長	伊藤 克代
秘書広報課長補佐	加藤 良子
秘書担当係長	川端 龍也

関係部局

教育部長	浅井 俊一
学校支援室長	山田 秋男
学校支援室長	奥平 剛
学校教育課長	秋永 亘正

傍聴者 2名

市長 今年も中学校の生徒との意見交換会を実施し、さらに、豊明小学校と二村台小学校でも小学校意見交換会を実施した。

今日の新聞に載っていたが、三崎小学校の4年生がSDGsの学習でクラスを横断してグループを作って、グループワークを行う取り組みの中で、1つのグループが「市役所に学習内容を提言するんだ」という目標を持ち、色々な人たちにインタビューをして、その情報をととてもきれいに取りまとめられ、提言書を教育長に提出された。

教育長から提言書を受け取ったが、このようなことは初めてで、同じような取り組みがぜひとも他の小学校で実施されたら良いなという期待のもと、感謝状を贈り、それが掲載された。

このように三崎小学校含め3校と小学校の児童とも意見交換できる場ができた。それぞれの学校事情や授業のペース、インフルエンザ等感染症の影響で学級閉鎖が起きたりするが、極力、中学校だけでなく小学校の児童とも意見交換できる場を増やしていきたい。

来年度以降、子ども基本条例を作っていくことになっている。

こうした中学校との意見交換を豊明市として、トップ2人が出向いてき

ちんと受け止めて、施策に反映してきている実績がある。また、意見交換会については、トップが変わっても永遠と続く状態にしていきたいという思いがある。そのような土台ができてきたので、条例を制定していこうとしている。

教育委員の皆様にもご指導いただき、ただ作っただけではなくて、誇れるような、実践性のある条例にしていきたい。

さて、今日は、先生の成り手がいない現状を踏まえ、先生の働いていた環境についての議論を主題に置いて、残り時間で学校訪問において出てきた話をお願いする形で運営を行う。

教育長 学校訪問では、これまでのように施設のことは言われなかった。

今の学校現場での問題は、働き方改革の問題や保護者対応の問題、休んでしまった先生の補充がいないなど人的な面が多いと感じている。人的な問題以外にも、日本全国の学校では事件事故をはじめ、日々色々なことが起こっている。我々としては、全国で起きる色々な悪い事例をしっかりと見て、それが起こらないように教育委員の皆様にも色々な事例を紹介し、議論して、子どもたちにとって良い方向に進むようにしていきたい。

2 議題

(1) 豊明市立学校の教職員に関する業務量管理・健康確保措置実施計画について
計画について、教育部長より説明

委員 学校と教師の業務の3分類のうち、授業の準備、給食の時間における対応のところで、授業の準備については、一番力を入れたくて、他に時間を割くよりも教材作りなどに時間を割きたいと思っていた。

給食については、他の委員とも意見が共通したが、給食は大事な食育の時間だと考える。教師にとっては休憩時間かもしれないが、この時間に悩みの相談をしたいと思う子もいるかもしれない。

何でも業務の分類をして、外部の人がやるのではなく現場の声も聞きながら整理した方が良いと思う。

教育長 授業の準備に関して、授業内容については教師の仕事なのでしっかり時間を割いてやっていただくことが大前提だと思う。

ただし、プリントの印刷や簡単なパソコン打ちなどの支援をすることで、少しでも本来の授業準備の部分に教師に時間を割いてもらうという意味ではないかと思う。

給食については、支援室長から説明願いたい。

市長 前提として、この計画は国が作成したものを参考になっている。

学校支援室長 市長からも話があったように学校と教師の業務の3分類は、国が示したもので、これをもとに豊明市の実情に合わせて、計画を出しており給食指導はここには入っていない。

給食指導については、委員が言うように大切なことだと思う。ここについては教師が引き続き、対応していく。

給食の時間は、教師の休憩時間ではないので、しっかりと食育を進めていきたいということで、ここには記載してないというのが現状。

委員 児童生徒の休み時間における安全への配慮、校内清掃、部活動について、

部活動は色々な面で難しいだろうというのが分かった。

その中で休み時間や校内清掃など、子どもに関わることは全て本当に大事にしなければならないと思う。

実施計画内、目標の（２）３つ目の点については、そういうことを落とさないように準備を進めていくということだろうと期待している。教師に一番大事なことは、子どもとの信頼関係の構築であり、子どもとの信頼関係さえできれば保護者もついてきてくれる。だから、子どもとの信頼関係を作るのが何より一番大事。

そのためには、子どもと接する時間が増えて、良い面、悪い面含め一人ひとり見つけていくのが教師の１番の仕事ではないか。

教科を教えることだけではなく、そういうところが大事ではないかとずっと思っていたので、そういう場である時間は決して減らさないような、働き方改革ができると良いなと思って、これから見守っていきたい。

市長 部活動については、議会での承認を得ているので、民間事業者を入れた状態かつ予算も非常にかけた状態で、中学校の土日の部活動については移行させていきたいと思っている。

学校支援 校内清掃について、国はどのようなイメージを持っているのか。

室長 大学だと学内清掃員の方がいて清掃している例があるので、その辺りをイメージしているのではないかと。

清掃については、美化指導の一環としての側面もあるため積極的に移行することはなかなか難しいのではないかと捉えている。

教育長 他校の事例として、落ち葉掃除とか雑草を刈るなどを地域の方に協力してもらっている状況を伝えるホームページを見たことがある。地域と協力できている学校とそうでない学校があり、そうでない学校では教師が実施している場合もあるのではないかと。おそらく、子どもの清掃ではなく、その部分を言っているのではないかと想像している。

市長 当市では、基本的に室長から説明があった通り、校内清掃についても児童生徒がやる形にして、それを教師がきちんと管理している状態になっている。

実は、中学生との意見交換でも冷たい水を使う冬のトイレ掃除だけ事業者に変えてもらえないかとの話があった。

この件については、生徒同士で解決していたが、冬の時期でもトイレ掃除をやりやすい状態にするため、備品を充実させようと３学期に向けて準備を進めている。

委員 県内のＰＴＡの方と話す機会があり、小学校での掃除がしっかりできていないこともあり、月に２回程度、お昼の清掃時間にＰＴＡと一緒に清掃をする取り組みを行っている学校が県内にはあると聞いた。

掃除のやり方自体は様々だとは思いますが、このようなことをコミュニティースクールなどで話ができたら良いと思う。

この実施計画を作るに当たって、各学校内で現場の声や様子を見た・聞いたということはないのか。

学校支援 この計画は、前身で昨年度まで実施していた多忙化解消プランを基に作成している。

多忙化解消プラン作成時点においては、各校に意見を聞き、校長会等で

提示し、各校の取り組みや要望を聞いてきた。

今年度に限っては、プランから計画に変更するので意見聴取はできていないが、計画自体はこれまでの積み上げで作成している。

委員

結局、実行するのは教師の方々。現場の声を大事にしていきたい。

このような計画を出す時に現場の声を蔑ろにすると信頼関係が崩れることがある。きちんと信頼関係を築いていきながら改革を進めていかなければならないと思う。

市長

資料にある「保護者等からの過剰な苦情や不当な要求等の学校では対応が困難な事案への対応」について意見を賜りたい。

実は、市役所内にはカスタマーハラスメント防止についてのポスターが至る所に貼ってある。商工会とも色々な形で連携・協力していただいております、前後駅での啓発活動などを一体となって取り組んでいる。

これについては、実は、お客様をノーだということは絶対にあってはならないとの前提を持って、カスタマーハラスメント防止について強化している。

市役所は色々な市民の皆様からご意見をいただきます。そうした中で自分たちが間違っていること、あるいは市民の皆様が自分の生活の中で気付いたことを言われている場合、それをシャットアウトしてしまうと何も気付けない状態で現状維持がずっと繰り返される組織になってしまうので、それらはきちんと受け止めてくださいということを前提にしており、職員には徹底させた。

その前提の下、あまりにも過剰な、あるいは、あまりにも長時間、毎日毎日同じことを言いに来られる方については、それを全部受け止めていくと職員が疲弊するだけでなく、限られた職員がそこに時間を取られると結局、他の市民の皆様を待たせる状態が発生することになる。

自分たちは、市民サービスを維持しなければならないので、過剰なものについては対応しないということをきちんと市民の皆様様に理解していただかないといけないと思ってやっている。

例えば、窓口での相談については、原則30分で打ち切る。実際には打ち切れてないが、そういった形で対応させている。

色々な困難な事案もあるが、カスタマーハラスメント防止については、基本的に市長名で進めており、市民の皆様からの意見は積極的に受け入れるけども、過剰なものについては、はっきりノーと言って構わないということを行った状態にしている。

これについては、学校側に負担をかけるのもどうかと思うので、こういったケースについては、学校側で受け止めないでくださいとした文書を市長と教育長の連名で発出したいと考えている。

結局、個別ケースの中で、疲弊し、休まれる先生がいらっしゃる。市役所と比べても学校の先生が、休まれるケースが多い状態なので、そういったことを検討していきたい。

学校現場にいるわけではないので、わかりかねる部分はあるが、子どもと学校が何らかの形で紛争になった時に、学校側が一方的に悪いというところから入ってしまっている保護者の方が非常に多くなっているというところからきているのかなとの印象を持っている。

- 自由な意見をお願いしたい。
- 委員 報道で見たが、他の自治体では、教員が本来の業務に専念できるように、また疲弊を防ぐことを目的として、時間を決めて対応する苦情受付専用のコールセンターをかなりの予算をかけて設置しているとのこと。
- モラハラ、パワハラといわれるようなケースについては、冷静な話し合いはできないだろうといわれている。
- そのようなケースについては、専門職などの第三者に対応してもらうようなシステムを豊明市でも考えてはどうか。
- 市長 委員のおっしゃるように、基本的にはそのような方向にしていけないといけないと思っている。
- コールセンター的なものを学校に配置するのか市役所に設けるのかなど、まだ何も決まっていない。
- 小売業では、基本的にその分野のプロフェッショナル1人に全部を集中させている。業界は、パート職員が多く、パート職員が対応すると休んでしまうことにつながるため、パート職員を守るために全部を集中させている。
- こういった形がいいのかは別にして、これから発出しようとしている文書も、「これ以上のことはここで受け止めます」といった形がセットでないと実効性がない状態になるので、実効性を担保した形にしていきたい。
- 委員 線引きが非常に難しい。100%不当だなんてはっきり分かるものもあれば、心配な思いが強く出ているものもあり、そのラインが難しい。
- 保護者としては、関わっている方と話すことで安心を得たいと思う。結局、何かトラブルがあっても学校に通うのは子どもで、学校内で解決することでその後も通えるようにしたいとの思いがあると思う。
- 第三者が入ることで話が整理できたり、いったん落ち着いたりすることはあると思う。
- 一方で、学校内での問題なので、第三者が入ったところで納得を得られず解決には至らないことも考えられる。不当な要求に限れば、第三者で対応できると思うが全てがそうではない。
- ただただ不安で先生に話を聞いてもらいたい人もいて、聞いてもらうことで不安を解消している。
- 教師もチームになって対応していくべきで、担任が背負ってしまうことが多い。校内でもすぐに誰かに相談できる仕組みを持つ必要があるし、どこに案内することが適切なのかを判断する力も必要になると思う。そうしていかないと保護者との間に溝ができてしまう。
- 一番かわいそうなのは子ども。コールセンターのような仕組みだけでは受け止めきれない案件も出てくるだろうと思っている。
- 市長 そういった意味では、学校側に校長先生でも教頭先生でも公務、教務主任でもない誰かが配置されている状態で、その人が全部受け止めていく形になっていると望ましい状態になってきますかね。
- 委員 そうですね。
- 先生もその方に相談ができて、お互いに相談できる状態が良い。
- 委員 多いのはやはりいじめだろうか。
- 一番は人間関係のトラブルではないか。先生との関係、友達との関係。

そうなるとカウンセリングがしっかりできるような人で、整理したり、これは人権の問題だからとしっかり言えたりするような人を配置した方が良いと思う。

市長 全校となると人材確保が難しい。臨床心理士の先生方も確保できていない。

委員 慣れた方が対応しないと、逆になるのは学校でもよくあるパターンなので、やはりそういうことに長けた方がどうしても必要だろうと思う。そのような方を全部の学校に置くのは無理にしても、すぐに動けるような方が何人かいてくださるというのは、すごくありがたいことだろう。来てくださいと言ったら飛んで来てもらえるような状態だったり、保護者と会う時に一緒に聞いてもらえたりと、そのようにして複数で保護者の話を聞くというのは良いと思った。

市長 複数で対応するというのが良いですね。

委員 保護者は担任に聞いてもらいたいと思う。

学業というよりは、いじめとか、子どもの心の問題などの人間関係の悩みが強い上に、親もどうしたら良いか分からないというのが一番多いと思う。それを先生が聞いてくれない。忙しくて聞く時間がないということが多いと思うけど、聞いてくれない。

だから、どこに話したら良いでしょうという相談を何度も受けたことがある。でも、やはり先生に言うのが一番大事だよと言ってきたが、それでも聞いてもらえないときには、教育委員会だろうがどこだろうが、電話をしてとにかく聞いてもらってねというふうには言ってきた。

ですが、やはり学校の中で担任の先生に聞いてもらうのが一番保護者は安心ができる。

そのときに真摯に対応する、すぐに否定したり、考え過ぎですと軽く受け止めたりせずにしっかり聞いてあげる。

そうすると30分では無理で、1時間とか、1時間以上になることもあると思う。それをもう時間になりましたからすみませんというのは無理で、そういう時には、その教師の他の業務を代わってあげる方が必要。

どこかの中学校でチーム担任制をやっていると知り、小学校もチームで子ども全員を見るという形にしていけば、どの担任もこの子はこうですよと言える。さらに情報交換をして、あの時はこうでしたと誰もが言えれば、対応することができて保護者はすごく安心すると思う。

だから、そういう形に持っていくのもひとつではないか。

ある学校で、各子どものことを全て答えられる教頭先生がいらっしゃった。そのように上の方も含め、学校のみんなが一人ずつ子どもを見ていて、うちの子たちを見ていてくれているという安心感が保護者にあれば、無理なことは言っていないと思うので、そういう体制が良いと思う。

市長 実際にチーム担任制を実行されている学校が市内で生じてきているので、効果なども見越しながら、水平展開していければというふうに思う。

委員 基本的には、学校にいる先生方が個人で受け止めないようする。

相談窓口も良いが、学校外になってしまうと学校内の状況がわからない中での対応も良くないと思う。

教師個人が受け取るのではなく、チーム学校でそれらを受け止めて、割

り振る体制が良いと思う。

市長 教育委員の皆様の意見としては、教員が1人で全部抱え込むわけではなく、チーム全体として生徒を受け止める。保護者も同様に受け止める。

複雑な案件については、外部のコールセンターではなく、学校に別の方がいて、そういった相談を受けることに長けた方が配置される状態で、その方が受け止めていくという形で解決に導いていくという方向が良いのではないかとのお話だったかと。

お金はかけても最終的にはやっていくしかないと思っている。

教育長 今年、2学期に教員向けアンケート調査を行い、その結果が年明けに集計されることになる。教職員が保護者対応でどのように思っているのか、どういうことで苦労しているのかということが形として出てくるので、まずはそれを皆さんと一緒に見て考えていきたい。

保護者対応は、大きく2つに分ける必要があるだろう。

明らかに社会通念上理不尽な「担任を変えろ」とか、「この子を違うクラスに持っていけ」など、できないようなことを要求してくる保護者もいるので、それは教師とは違う第三者が入ってきちんと整理して対応することが必要で、それ以外の子どもの発達、学業、友達関係の問題は、相談したいことが多くなるなど長時間になるケースもきつとあると思う。そこはやはり学校が中心となり、なるべくチームで上手に対応して、保護者の悩みを解消できるような流れを作る形にするしかないのかなというふうに思う。

だから、2つに分けるべきではないかと。

市長 今までの議論で実情とずれている部分はなかったか。ずれた方向で定まっていくと問題。

支援室長 間違った方向には進んでいない。

市長 お金はかけていくしかない。

ただ、人材の確保とか、どのような方が適任なのかは見極めていく必要がある。

11校全部にすぐに配置することはできないので、市長部局と教育委員会ですっかり議論した上で、来年度以降、このことについては充実させていきたいと思う。

最終的には先生方が、子どもたちと向き合う時間がたくさん確保できた状態で、しっかり授業の準備もできる体制をとっていただきたいというふうに思っている。

委員 他の委員の言葉が印象的だったが、所属する研究会で、子どもが変われば親が変わる、親が変われば子どもが変わる。また、子どもが変われば教師も変わる、教師が変われば親も変わる。これにより信頼関係における良い循環ができると話している。

苦情対策ばかりではなく、苦情が出ないような対策をとおっしゃられたと思う。

苦情が出なかった教師は、どの子のことも知っていて、発達障害の子のことも、各家庭の事情などについても知っている上で、相談に乗っていた。このことから苦情対策の前に信頼関係のことを考えないといけないと思った。

市長 前提条件としては、信頼関係を作らないといけないと思う。これは、職員にも言っている。

今の市役所の方針は、極力市民の方に協力頂いて、市民の皆様の生活を向上させる方向にあるので、市民の皆様の気持ちは絶対に受け止めるように、それだけは強く言っている状態になっている。

(2) 教育委員会学校訪問に係る報告について

委員 単焦点プロジェクターについては、感謝の声をたくさん聞くことができ、しっかり活用もされていた。

一方で相変わらず要望として多いのは、特別教室のエアコンと体育館のトイレ。特に豊明小学校の職員トイレや駐車場の問題は、これまでもこの会で話題に出ているが、難しい課題がまだまだあると感じる。

不登校対策の取り組みなどがなされており、様々な方がそれぞれ一生懸命取り組まれているが、うまくかみ合っていないと感じた。

例えば、共生社会課の新事業だとか、教育支援センターの在り方とか、それぞれやっているけど、うまくかみ合っていない部分があったり、部活動も廃部になったのに復活したり、何かうまくかみ合っていないところがあると感じたところがあった。

それから、協同の学びや地域との連携の部分についても取り組んで先生方が検証されてやっているけど、目に見えて変わっているというのを見るのは難しいのかなと思うし、学校によっては自由進度学習とか、先生が工夫されて取り組んでいることは良いことだが、何かちょっとばらばらになってしまっているのかなと感じている。

地域との関わりも各学校が学校運営協議会を工夫しながら、例えば、夏休みにグループワーク形式で会議をしたりだとか工夫している学校もあるけども、まだ地域の方々に学校の草取り程度を手伝ってほしいというようなことぐらいでしか議論が進んでいない感じで、子どもたちをどう育てていくのかという観点での議論が進んでいないかなと思う。

部活動の問題や児童生徒たちとの意見交換会で居場所の話が出たと思いますが、子どもたちの体験の場を減らさないようにして欲しい。

もちろん部活動も先生方の働き方改革も必要でしょうけれども、やはりあのような活動がなければ、例えば、小学生が大きなラッパを吹くことはないと思うし、体験する場が減っていくのは良くないと思う。可能であればもっともっと色々な体験をして欲しいと思うし、昨今言われているように、経済的な格差で体験できる、できないがあってはいけないと思う。

体験に対する経済的な格差が生じないような形で子どもたち自身が自由に体験できる場というのを減らさないで欲しいということを要望する。

市長 設備については、特別教室に順番に入れていく形になっている。豊明小学校については、プールを取り壊さないで敷地を広げようがない。極力早く、プールを取壊していく。

教育長もそれは言っている。

先に栄小学校の改修をやらないといけない状態。豊明小学校の職員駐車場は、プールを取り壊してからでないと確保できない。

トイレについては、どのような状況か。

教育長 相当困難で相当な費用が掛かることが分かった。配管が古く上水も下水も相当な老朽化が進んでいるため莫大な費用が掛かる。他の学校でも配管の改修はやっていない。

市長 他とも調整する必要がある難しい問題と認識している。

例えば、男性は仮設トイレを設置して、そちらを利用してもらおうというような選択肢もありかと。このような事業所はたくさんある。

女性については、慎重に進める必要があるので、女性が優先された状態でトイレ問題は解決していきたい。

子どもたちの体験については、強く思うところがある。

中学校の土日の部活動が民間に移行するが、基本的な経費負担は極力安くする状態で移行していきたい。

小学校も部活動が縮小している状態になっている。

学校の先生方には、授業に対して責任持ってやっていただかないといけない。

子どもたちの色々な体験をする機会を失わすことは良くないので、一定程度お金を掛ける形にしていきたいと思う。

地域のお祭りごとに参加することも非常に大きな体験になると思う。お祭りごとの担い手がどんどん不足していつているので、この点についての地域側の支援もしていかないといけない。

子ども会も激減している状況となっていますので、色々な形で地域を支えていく、仕組みを作していきたい。

委員 普段の遊びも含めて体験できる場ができると良いと思う。

委員 施設面に関しては、話が減った。直接、委託の人と話ができて連携がスムーズになった結果かと思う。

先生から樹木に関する話があった。学校の樹木は大きいものもあるし、理科の先生がいるにしても、勝手が違うようで管理が難しいとのこと。色々な人が出入りする駐車場や外にある樹木のことを心配していた。

館小学校の避難経路については去年も話したが、1か所からしか外に出られない状況が一切変わっていなかった。

防災に長けた人と相談して避難経路を考えるなり、壁を壊すなりして学校側が安心する対応をお願いしたい。

今年の訪問で出口を探したが、電動シャッターくらいしかなく、電気がなければ動かないから、結局、避難できる出口がなかった。

市長 主要な構造物に当たる壁や柱は変えられないから、外付けで設置しないといけないと思う。

委員 避難経路について、先生方と相談して、訓練ができるような形をとらないと先生方の心配や不安は解消されないのかなと感じたので対応をお願いしたい。

不登校の子たちについては、重層支援センターや教育支援センターが動いてくれていて、学校内では校内フリースクールなど様々なところ関わっている。

結局、不登校の問題は1人ずつそれぞれ違うため、色々なところが動いてたくさんの目で見ることはとても大事だと思う。学校に来られない子た

ちにとって色々な場所があることはとても良いこと。

しかしながら、ばらばらに動いていてとてももったいないなどの印象を受けたため、上手に連携できると良いと感じる。

また、今回の訪問では、市側と学校側のコミュニケーションがうまく取れていない部分があるのではないかと感じた。

予算面をはじめ、パソコンやＩＣＴ、セキュリティのことは市側が決めていくと思うが、その点に関して学校側と連携が取れていないと感じる。学校側にもそれぞれ思いがあり、効率的なやり方を考えるなどしているようだが、市側から理由がないままノーだけ出されているように受け取っている部分があるように見受けられたので、連携を上手に取ってほしい。

日本語教育について、外国籍の児童・生徒が本当に増えてきていると感じた。中学校では、人数はそこまで多くなかったとしても、進学に直結するので指導に悩んでいますとの声を聞いた。

普段は子どもたちも明るく過ごしているが、授業中は静かにしていて、先生たちも悩みながら教えているが、付きっきりとはいかないし、支援も月に数回しか来られない状況。

豊明中学校は、国際交流協会が入っているが他の中学校には入っていない。

担当職員が、精力的に活動しているが、１人で全校回るのが厳しくなっていると感じているので、体制を考えていく必要があると思う。

現状、コミュニティースクールについては、とても前向きな学校と地域との関わりに困難を感じている学校がある。

三崎小学校をモデル校として今後進めていくとのことなので状況を見ていきたいと思うが、それぞれ地域の特色があるので、モデル校も大事だが、ぜひ各学校の特色に合わせて、それぞれで地域とどのように連携していくのが良いのかを考えていけると良い。

これは学校任せにはできないことで、コーディネーターが入っているけども、入る人によって変わっていくと思う。子どもたちがより良く育っていけるように考えられるキーとなるような人材が必要だと感じている。

市長

コミュニティースクールについては地域の人材も違う。非常に特殊な人材の方が長年ずっと関わっている経緯がある学校もある。そのようなところは、自然の流れのままにすべきだと思う。

三崎小学校のモデルを水平展開するのではなく、それぞれ人材や経緯に合わせて、コミュニティースクールは進めていくべきだと私も思う。

これについては、全員がやっぱりウィン・ウィンの状態にならないと続かない。ボランティアについてもそうだが、みんなが楽しんでやれる状態。地域も楽しんでやれる。学校の先生の負担軽減もできる。生徒や児童の成長にもつながる。そのような状態にしていけないといけないので、その方向で考えている。

日本語教室については、やはり二村台小学校の比率が高くなっているのので、そこに資財を投入せざるを得ない。全体の教育を維持しないといけない部分もある。

小学生は、プラスエデュケートに来られる状態にしている。

しかしながら、高い学年で日本に来た子の日本語教育が難しい。保育園

の年齢で来た子たちは読み書きも全部できるようになるが、高い学年は非常に難しい。

これはずっと言われている問題で、問題意識として持っている。中学校を卒業した後の進路について、色々な選択肢を持って提案できる状態にしていかないといけないと思う。

不登校の問題については、今年度の途中から本格的に重層支援センターも動く状態になった。

家庭側に課題がある場合もあり、保護者も含めて対処しないといけない案件を基本的には重層支援センターが持つ状態だという形で捉えている。

例えば、学習についていけない場合やもともと発達的な障がいがある場合、その子の特性に合わせた教育が必要となるが、それは重層支援センターで対処できる話ではないため切り分けた状態となっている。

年度の途中からそのような状態を導入したため、連携が十分にできていない部分があるように見えると思う。

ただ、少なくともこのようなケースは解決できたという実績もできている。

あらゆる自治体が、ただ手をこまねいているだけで何も動けてない状態であるのに対して、豊明市は少なくとも一歩、二歩は進めた状態になっている。

これまでの実績がある教育委員会との連携を十分に取りながら、子どもたちが少なくとも居場所は確保できている状態、自分の居場所はここだと思えるような場所は確保していきたい。

館小学校の避難経路については、早急に対応する。

壁とかは壊せないで、それを前提でやっていくしかない。既存建物の中で、どのような避難の方法が一番現実的なのかを考えていくしかないと思う。

教育部長 出口について議論した経緯はあるが、逆に安全対策が足かせになっている状況でもあるので、色々と考えたい。

市長 非常時のみ利用できる外付けの手すり付き階段を作るなど、現実的な対策として今の構造上できることを考えていくしかない。

委員 スマホ条例は良かったと思う。

今、人と関わる力がどんどん落ちている。SNSは人とつながるツールだけれども本当はつながっていない。

特に不安なのは、教職員のメンタルヘルス。

クラスに荒れている子がいる時、その子は人と関わる力が弱い場合があり、勝負にこだわったり、折り合いをつけて仲直りしたりすることができない場合がある。学級崩壊になりそうな状態を先生が止めたらパワハラと言われ、先生は心病んで学校に来られなくなったとの話を聞いた。

これについては、人と人との関わり方が問題ではないかと思う。

今、協同の学びを文化にして、人と人をつなぐものにしようとしているが、まだそこまではやり切れていない。

根本には信頼関係が必要で、信頼関係というのは、時間をかけて、特に不登校や、心の病を持つ子に対しては、その子の本当の願いは何なのかを想像し、求めていることにベクトルを合わせることで構築することができ

る。教師には、想像し、ベクトルを合わせる力が求められているが、余裕がない。

ある施設では、学習ではない遊びを通して、その子の声を聞こうとする先生がいる。そこには、何時間かけても通いたいと思わせる先生がいる。要は人。

子どもだけでなく親も人とのつながりがいいから孤立している。ぜひ、市として人とのつながりを支援して欲しい。

メンタルヘルス不調や産休・育休など様々な要因で現場の教員数が足りない状況がある。豊明市で教職員用の人材バンクみたいなものができるとうい。

また、人とのつながりでメンタルヘルス不調の教師が立ち直れるようなシステムがあると良いと思う。

学校と教師の業務の3分類に教師が教師でなければできない業務とあるが、抽象的だと思う。

個人的には、教師の専門性は、児童生徒の意欲を引き出す力だと思う。事務仕事は事務に特化した方を雇うこともできる。教師だったら目の前の子が困っているなら話を聞く、何とかやる気になるように持っていく。

教師にとって本当に大事なものは、その子の立場に立って考える力だと思うが、そこが抜けているのではと感じる。

教師は、学者であり、医者であり、易者であり、役者であると聞く。学者は、知識を伝える。医者は、心の健康を保持する。易者は、子どもたちの将来の姿を見越す力。進路については、誰かに任せれば良いではなく、この子はこういうのが合うのではないかと考える力が教師には求められる。一人の教師との出会いが、その子の将来に影響を与える例はいくつもある。

役者は、自分の人格を変えて、各個人に合わせてちゃんと寄り添うような役者を演じる。

教師の先輩たちが伝えてくれたこのことを現役の教師の皆さんに伝えたいと思った。

市長 コミュニケーションは、ありとあらゆる場面で必要だと思う。

特に学校現場は、最終的に子どもたちの意欲を本当に引き出す仕事なので、先生同士も、先生と子どもたちも、先生と保護者も、コミュニケーションがありとあらゆるところで行きかっている状態が良い。

委員 今、新卒で入ってくる教師は、先輩教師から学ぶ時間がない。昔は、仕事が終わってからの交流を通して、先輩の技や技術を学ぶことができたが、今はそのようなことがほとんどなく、仕事が終わればさっと帰宅する様子を見ると若い人はどこで勉強しているのだろうかと思う。

素晴らしい研修や実践をしている方がたくさんいるので、学べる場をもっと作って欲しい。

学ぶためには時間が必要だが、教師たちは日々のことに追われて、本を読んだり、研修を受けたりすることもできず、疲れて何もできないという状態になっている。

自ら学べるようになると良いのになと思う。

昔は自分が子どものお手本にならなければならないと考えており、道徳

が一番大事だと思って過ごしてきた。今は、道徳プラス専門性をもって、専門のものに触れさせてあげることが大事で、体験などの良いものに触れさせてあげることで子どもは伸びることが分かってきた。

子どもたちはよく見ていて、教師の言うことは全然聞かないがやっていることはまねしてくれた。

教師の犯罪が話題となる中で、専門性も大事だが道徳性も大事だと感じている。

学校訪問で感じたのは、各学校で色々な体験を取り入れていて、それぞれにカラーがありすごく良いと思った。

ある学校では、普通はやれない陶芸をやらせていたり、別の学校では、棒の手やお囃子を体験し、みんなの前で発表させたりしている。その他にも、地域の方に助けてもらってしめ縄づくりを体験するなど、本当にそれぞれが工夫して特色のある体験をさせていることに感動した。

訪問の中でダジャレ絵本の話があった。ダジャレが好きな子がせっせと作った絵本に先生が注目し、しっかりとした硬い表紙を作ってあげて学校図書館の蔵書としてみんなが読めるようにしたとのこと。その子はすごく喜んだと思う。そういうことが子どもを伸ばすと思う。

そのような形で一人ひとりを大切にしている学校がたくさんあるなと感じた。

ダジャレ絵本に限らず、色々なことで一人の子どものことを取り上げるためには、心に余裕がないとできないことだと思う。そういうことが見られて良かった。

不登校や特別支援の児童がものすごく増えていることに驚いた。

教育委員会の中で、共生社会課が「ＣＯＣＯカラプログラム」を始めたと言った。子どもではなく親に寄り添い、親にアドバイスをしていくこの取り組みが素晴らしい。親はとにかく不安を抱えている。小さい子ほど、親が変われば子どもは変わる。親を変えていくというのは、回り道のように手っ取り早いことだと思っている。

この取り組みは、不登校だけだったり、少人数だったりとは今は限られているようだが、このプログラムはもっと広げていって欲しい。

市長 「ＣＯＣＯカラプログラム」のキャパシティはまだまだ増やしていけると現場は言っている。

今は、実績を確実に積み上げていく段階で、ここまでのレベルまではやれるというケースを増やしている状態。

現状としては、心理士の職員が中心となって親の伴走支援を実施し、一方で別の職員が子どもたちの居場所を確保して、両方をサポートしている状態で進めている。

委員 親の会などの機会で相談を受けますと言っているが、ネットやスマホだけではなく、口コミがやはり一番だと思う。

親同士や子供会などの場で、こういうのもありますよなどの口コミが広がるような形があると良いと思う。

市長 ダジャレ絵本の話は面白い。この子からすると認められた感が抜群にある。

三崎小学校の感謝状贈呈についても、間違いなく素晴らしいことをした

ので、感謝状を渡すことで自分たちが認められたとちゃんと伝わるようにした。ありがとうだけでは伝わらないので、感謝状という形にした。

このようなことを少しずつでも積み重ねていくと、色々な子たちが学校というところがとても楽しい場所だとか、ちょっとだけ邪魔くさいことをやるのがとても意義のあることだということがわかってくるのではないかと思う。

委員 子どもたちが何を求めているか考えたときに、三崎小学校の提言書から、本当は身体をぶつけ合えるような遊びがしたいという要求があるけども、手元にスマホがあれば要求が満たされてしまう。

でも、心の中では本当に部活もやってみたいし、友達とぶつかり合いながら最後は感動して涙を流したいという思いをヒシヒシと感じた。

ダジャレ絵本は、感動した。本当に子どもらしくのびのびとした作品がたくさんあった。

委員 今後、部活動が民間に移行されていくことになるが、他市では、市がうまくいっていると言っても現場はそうではない事例がある。

辛い思いをするのは、現場の生徒や教員。

現場を見ることは難しいかもしれないが、試合の現場では他者にも迷惑をかけることになるので、市も現場を監督するような目をしばらくは持っていてほしいと感じている。

また、教師の中には、部活動を生きがいと感じている方もいる。民間移行のことは、今は生徒にしか伝わっておらず、教師にはどのような方向性になっていくのかという方向性が伝わっていない。

生きがいを取り上げてしまうのか、何とかうまくやれる方法を見出すのかは、今後だとは思いますが、早めに方向性を示すことが大事だと思う。

市長 民間移行の問題については、事業者からいつでも情報をしっかりと上げてもらえるように、密に情報共有していかないといけない。実は問題が起きているという事実がわからない状態で推移すると、結局は色々な人たちが不幸になる。そうでないと今から試合という段階にもかかわらず、選手も選べていないということが起こり得る。

試合現場が非常に難しいことは、先行自治体から聞いている。

学校組織なので、伝わっている方とそうでない方がいると思うが、意思決定が終わり、民間事業者に移行することはすでに決まっている。

どこまでが問題なくて、どこまでがダメなのかがわからずモヤモヤしている教師がいるとの指摘だと思うので、運営についてきちんと伝えられるようにしていく。

教育長 この問題は、2年ほど前から校長会などを通じて伝達しているが、全体には浸透していない。

豊明中学校に説明に行った際には、「これもやってくれるのか」や「こんなにももらえるのか」などの声が上がった。別の学校からは、全員に対して説明してほしいとの要望を受けている。

部活動の地域展開は、働き方改革の一環として実施しているので、時間外を月に60時間、70時間やっている人が、土日もお金をもらって部活動をやるということに対して許可を出していくことは難しい。あくまで月45時間が目安だと伝えている。

しかし、全体には浸透していないので、直接説明していく必要があると感じている。

支所大会などの大きな大会については、月45時間は置いておいて、担任の先生に関わってもらって、審判などをお願いできないかと思っている。夏や集大成の大会はそうにして、それ以外の大会については、違う人がやっても良いのではと思っている。